

場面を展開する右近内侍

—『枕草子』における登場人物の役割と展開—

古 瀬 雅 義

はじめに

『枕草子』に登場する右近内侍は、一条天皇付きの内裏の女房である。出自は未詳ながらも当時の男性貴族が記した日記では、藤原行成が記した『権記』、藤原道長が記した『御堂閔白記』に見えるほか、源時明の家集『時明集』の詞書にもその名が登場する。

『栄花物語』巻五「浦浦の別」にある記述によると、中宮定子が脩子内親王や敦康親王を出産した時、右近内侍はその御湯殿に奉仕するなど、定子とも親しい間柄であったようだ。

『枕草子』¹⁾では、第六段「翁丸章段」と第八三段「雪山章段」といった長編章段のほか、第九六段「職におはしますころ、八月十日の月明き夜」と第二四段「細殿に便なき人なむ」の短編章段に右近内侍の名が記されている。日記的章段で合計四章段、六場面に登場しており、内裏の女房でありながら定子の元によく出入りして

いたことが確認できる。いずれの場面においても、脇役としてその言動が記されるにすぎないのだが、右近内侍が登場することで、それらの場面が急展開している点は、注目に値すると思われる。

私は『枕草子』の章段内構成を分析するに当たり、書き手が「出来事」を「書く内容」としてまとめ、順序立てて話を再構成する時、その展開と表現を有機的に絡み合わせ、結果として章段全体の構成が緊密になるように話題の軸を設定し、それを中心に意図的に計算して書いていることを論証してきた²⁾。

本稿では、まず、一条天皇の時代における右近内侍の位置付けを考察する。次に、『枕草子』において右近内侍が登場する四章段、六場面すべてをとりあげ、書き手が右近内侍を登場人物として記述することによって、場面がどのように展開していったのかを細かく分析する。そして最後に書き手が意図した、登場人物としての右近内侍の役割についてまとめてみたい。

一、右近内侍について——同時代の記録類から——

まずはじめに、一条天皇の時代の記録から、右近内侍³についての記述を確認しておきたい。藏人頭右大弁の藤原行成は、『権記』⁴長保元年（九九九）七月二日条に「右近」の名を記している。

〈資料一〉『権記』長保元年七月二日条

廿一日、早朝参内、以交易絹支配女房、三位六疋、民部・大輔・衛門・宮内各五疋以上御乳母四人、進・兵衛・右近・源掌侍・靱負掌侍・前掌侍・少将掌侍・馬・左京・侍従・右京・駿河・武藏・左衛門・左近・少納言・内膳・今十九人各四疋、中務・右近各三疋、女史命婦二疋、得選二人各二疋、上刀自一人一疋、

これは出羽国から進上された臨時交易の絹を、内裏の女房たちに支給したという記事である。藏人頭藤原行成は「早朝参内、交易の絹を以て女房に支配す」として、以下具体的に配布した絹の分量と女房の名を具体的に記している。ここで乳母の次に記される集団にその名が見える右近（掌侍）⁵は、進や兵衛らと共に、四疋の絹を支給されたところである。

藤原道長は、『御堂関白記』⁶寛弘二年（一〇〇五）五月二日条に「掌侍（右）近」の名を記している。

〈資料二〉『御堂関白記』寛弘二年五月二日条

二日、己酉、参内、臨時御読経定僧名、御論議問候御前、亥時還出、令申別當云、入量能宿所盗人籠前掌侍近家、承宣旨可左右者、可検者、右近令申云、不候盗人と、尚尋求得之、檢非違等参藏人所令申此由、賜勅録。

「前掌侍近家」とは、続く「右近」の「右」字が脱落したものと見られるから、「前掌侍右近家」の意と見られる。あまり穏やかな記事ではなく、量能^{かむね}の宿所に入った強盗が右近内侍の家に籠城し、右近は「そんな者はいない」と答えていたのだが、結局、檢非違使が検分して捕らえたという事件で、これ以上の詳細は不明である。なおこの記事から、右近は寛弘二年五月にはすでに掌侍の役職から引いていたことが確認できる。

次に、私家集や歴史物語に見える右近内侍の記述を確認したい。

『時明集』⁶では、詞書に「右近内侍」の名が確認できる。

〈資料三〉『時明集』

- 時明、讃岐の守など言ひし後は、ほくし^{よつ}右近内侍に
- 1 よもすがらをやまぬ雨のあししげみ今朝の汀を思ひこそやれ
又
 - 2 わびつつも逢坂山は越えにしをあやしく関にまどふ頃かな
右近内侍に、はやう

25 ひかげさす雲の上人ゆきずりのやまあのころもいくへ重ねつ
源時明は文徳源氏で、大斎院選子に仕え歌人として名高い馬内侍

や、『枕草子』の中で失敗談が笑いの対象として描かれた方弘の父である。永祚二年（九九〇）に皇太后宮大進として女院詮子に奉仕し、長徳元年（九九五）に讃岐守を任三年で辞したことが、藤原実資の『小右記』⁷長徳二年九月四日条に見える。『時明集』の第一番歌では、讃岐守任官後の源時明の贈歌詞書に「右近内侍に」とあり、二番歌とともに送ったらしい。また、第二五番歌は卷末歌である。右近内侍の返歌がないのが残念だが、讃岐守となつてからなかなか逢いに行けなくなつた時明が、右近内侍に対して未練を訴える贈歌となつている。

『栄花物語』⁸には、一条天皇の使者として活躍する内裏の女房として、巻五「浦浦の別れ」に六箇所、巻六「かがやく藤壺」に一箇所と、あわせて七箇所に登場する。順に検証してみたい。

〈資料四〉『栄花物語』巻五「浦浦の別」長徳二年（九九六）

〔二〇〕一条天皇の思いやり

淑景舎は春宮より常に御消息絶えず。¹内にはいみじく思せど、世の中に思しつづみて、ただ右近内侍して、忍びて御文などはありける。²（中略）猶ふりがたく、この御中にはこの宮（定子）ぞすぐれさせ給へる。

長徳二年（九九六）夏の出来事で、「世の中に思しつづみて、ただ右近内侍して、忍びて御文などはありける」とあり、一条天皇が実家の二条北宮に里下がりしている定子のもとへ密かに文を送る使

者を、右近内侍が勤めていたことを記した記事である。

また、定子が脩子内親王や敦康親王を出産した時の出来事を記した場面でも、右近内侍が一条天皇からの「仰せ言」によつて指名された使者として登場していることに注目したい。

〈資料五〉『栄花物語』巻五「浦浦の別」

〔三〇〕脩子内親王誕生 長徳二年十二月

宮の御産の事も思し嘆かれけり。十二月の廿日の程に、わざとも悩ませ給はで、女（御子）脩子生まれさせ給へり。³（中略）御湯殿には内より仰せ言にて右近内侍ぞ参りたる。いとつつましく恐ろしき世なれども、上の仰せ言のかしこさに参りたるなりけり。

（中略）御衣の色より始め、誰もうたてある御衣どもに、若宮（御子）の物あえさせ給はず、白くうつくしうおはしませば、右近内侍「あはれ、これを疾く内にご覽せさせ奉らばや」と聞えさす。

〔三二〕参内して一条天皇に奏上 長徳二年十二月

かくて右近内侍、七日が程過ぎて内に参れば、様々いみじう細かなる事どもをせさせ給へれば、⁴「何を疎しと、かくは煩はしき事どもをせさせ給へるならむ。ただ右近をば睦まじうあなづらはしき方にてと、上の思しめしてせさせ給へる甲斐なく、いかでかくおどろおどろしき御事どもをば。問はせ給はんにも奏すべき方候はずなん」など啓して、返す返すかしこまりて、やがて内へ参りければ、上は忍びやかに召して、日頃の御有様

こまかに問はせ給ふに、よろづさしましつついみじうあはれに奏すれば、御涙も浮かせ給ひて「げにさぞあらむかし」とおほしめし続けさせ給ふ。若宮の御うつくしきなど奏すれば、「かれを見ればやな。(中略)あひ見ん事のいつとなきこそ」など、あはれに語らはせ給ふ。「いみじう様々よろづせさせ給へるこそ、いとかたじけなく、かしこく候へ。えもいはぬ装束して給はせられど、一日にとてなむ納めて候ふ」など奏すれば、「心ばへのおとなおとなしうあはれなる方は、誰かまさらむ。また人をあまた見ぬにやあらむ」など、いみじう御心ざしあるやうに仰せらる。

〔四〇〕 懐妊した定子への使者 長保元年（九九九）

宮はかくて御心地苦しう思さるれば、せちに聞えさせ給て出でさせ給ひぬ。その程、弘徽殿、承香殿など、参りこみ給ふ。されど御心ざしの有様こよなげなり。内よりはよろづに様々のおほつかなさを、御文ひまなし。大方にて日ませなどの御使あり。右近内侍ぞ、さりげなき伝へ人にては候ひける。

〔四四〕 敦康親王誕生 長保元年十一月

いみじき御願の験にや、いと平らかに男御子生まれ給ひぬ。

〔中略〕 御湯殿に右近内侍、例の参る。

ここでは「右近内侍ぞ、さりげなき伝へ人にては候ひける」〔四〇〕として一条天皇からの使者として往來するほか、「御湯殿には

内より仰せ言にて右近内侍ぞ参りたる」〔三〇〕あるいは「御湯殿に右近内侍、例の参る」〔四四〕とあることから、実際に出産の場面に立ち会って御湯殿に奉仕し、また産まれてきた若宮の様子を一条天皇に奏する役目（二三二）も果たしている。

さらに、長徳四年（九九八）に起きた右大臣藤原顕光の娘、承香殿女御元子の懐妊騒動とその顛末に対して、右近内侍は内裏にいる一条天皇から遣わされた密かな使者として奉仕している。

〈資料六〉『栄花物語』巻五・巻六

巻五「浦浦の別」

〔五一〕 承香殿女御元子懐妊の顛末 長徳四年（九九八）六月

かの承香殿女御、御生が月も過ぎさせ給ひて、いとあやしく音もなければ、よろづにせさせ給へど、思しあまりて六月ばかりに太奏に参りて、御修法、薬師経の不断経など読ませ給ふ。

〔中略〕御気色有りて苦しうせさせ給へば、殿しづ心なく思し騒ぎて、まづ内に右近内侍のもとに御消息遣はしなどせさせ給へば、御前に奏しなどして、「いかにいかに」など御使あり。

〔中略・水のみ産む〕内には聞こしめして「ともかくも物も仰せられてこそはあらめ。右近が物騒しう言ひて、かう物狂は

しうはからひて、あさましきわざにこそありけれ。ただなるにはこよなく劣りてもあるかな」とぞ、いとほしう思しめしける。

卷六「かがやく藤壺」

〔一八〕一条天皇、里邸の承香殿女御元子に文を送る。

内に、承香殿〔元子〕を人知れずおぼつかなく思ひ聞えさせ給ひて、

わざとの使者には思しめしかけず、参る人もなければ、もとよ

りかの御心よせの右近内侍にむ、御文忍びやかに通はし給ふと

いふ事おのづから漏り聞ゆれば、殿〔親〕はともかくもの給はせぬ

に、いとかしき事に畏まり申して、内にも参らず。されば、

殿〔長〕の御前「右近内侍が参らぬこそあやしけれ。己を見じとてか

うしたる」などの給はせけるしもぞ、なかなか「げになめう思

しめしけり」など、人々思ひける。

定子に限らず、元子の懐妊と顛末を記した箇所にも、右近内侍の名が見える。巻五〔五一〕では、懐妊の兆しが見えた元子の様子を、父の顕光が右近内侍を通じて一条天皇に奏上している。この懐妊は想像妊娠に終わったらしく、以後実家に留まったまま内裏に戻ってこない元子を不憫に思った一条天皇は、密かに使者として右近内侍を遣わすが、その時に「かの御心よせの右近内侍」と記されている（巻六〔一八〕）ことは注目されよう。

以上、右近内侍が『栄花物語』に登場する全場面を検証すると、「内裏の女房」である右近内侍は、出産に関わる具体的な実務だけではなく、「御心よせの右近内侍」として一条天皇の意を相手方に密かに伝える使者としての役目まで、その名をわざわざ挙げられて

担当していることが確認できる。『栄花物語』に描かれた右近内侍の人物像は、そのまま一条朝の女房たちにとつての共通理解でもあった、と見てよいだろう。

二、『枕草子』長編章段の右近内侍①—翁丸章段—

これらのことを確認した上で、『枕草子』における右近内侍について検証してみたい。

『枕草子』において、右近内侍は四章段六場面に登場する。いずれも日記的章段であり、長編章段の第六段「翁丸章段」と第八三段「雪山章段」に二場面ずつ、そして短編章段の第九六段「職におはしますころ、八月十日の月明き夜」と第二二四段「細殿に便なき人なむ」にも記述が見られる。以下、章段順に考察してみたい。

第六段「翁丸章段」は、長保二年（一〇〇〇）三月の一条院今内裏での出来事を記した長編の章段である。一条天皇の愛猫を追い回した犬の翁丸が、天皇から「この翁丸、打ち調べて犬鳥へ遣はせ。ただ今」との勅勘を被る。その命令を受けた藏人忠隆・なりなか・実房らが翁丸を打ち、陣の外に捨てたと聞いて、清少納言たちがこの犬に同情する場面である。

〈資料七〉第六段「翁丸章段」長保二年（一〇〇〇）三月

A 三、四日になりぬる昼つ方、犬いみじう鳴く声のすれば、なぞの犬のかく久しう鳴くにかあらむと聞くに、よろづの犬とぶ

らひ見に行く。御厠人みかほやうどなるもの走り来て、「あないみじ。犬を蔵人二人して打ち給ふ。死ぬべし。犬を流させ給ひけるが、帰り参りたるとて、調じ給ふ」と言ふ。心憂のこや、翁丸なり。「忠隆、実房など打つ」と言へば、制しにやるほどに、からうして鳴きやみ、「死にければ陣の外に引き捨てつ」と言へば、あはれがりなどする夕つ方、いみじげに腫れ、あさましげなる犬のわびしげなるが、わななきありけば、「翁丸（前少輔）か。このころかかる犬やありく」と言ふに、「翁丸」と言へど、聞きも入れず。

「それ」とも言ひ、「あらず」とも口々申せば、「右近（定子）ぞ見知りたる。呼べ」とて召せば、参りたり。「これは翁丸か」と見せさせ給ふ。「似ては侍れど、これはゆゆしげにこそ侍るめれ。また『翁丸か』とだに言へば、喜びてまうで来るものを、呼べど寄り来ず。あらぬなめり。それは『打ち殺して侍りぬ』とこそ申しつれ。二人して打たむには、侍りなむや」など申せば、心憂がらせ給ふ。

この場面Aでは、当の犬が翁丸かどうかを判別するために、中宮定子がわざわざ右近内侍を呼び出して判別させている。ここで私は、書き手の清少納言が翁丸を描写した「いみじげに腫れ、あさましげなる犬のわびしげなるが、わななきありけば」に対し、右近内侍の会話文で「これはゆゆしげにこそ侍るめれ」と受けているこ

と、および「翁丸」と言へど、聞きも入れず」に対し、右近内侍の会話文では「翁丸か」とだに言へば、喜びてまうで来るものを、呼べど寄り来ず」と受けていることに注目したい。

右近内侍は「あらぬなめり」（「似てはいるが、違うように見える」と答え、その理由を二点あげている。

・「翁丸」と呼んでも、この犬は返事をしないこと。

・翁丸は撲殺されたはずで、蔵人二人が打ち調じたのだからまずまちがいないこと。

これは冷静な判断であり、説得力があると同時に、翁丸に対する配慮も看取されよう。もしここで右近内侍が「翁丸だ」と判定すれば、この犬は再度打たれることになるはずである。したがってこれは「誤審」ではなく、この同情されている犬を救うための「機転」と見てよいだろう。ただし、定子はその発言を真に受けてがっかりしているけれども。

続いて翌朝の出来事にも右近内侍が登場する。

〈資料八〉第六段「翁丸章段」

B 暗うなりてももの食はせたれど食はねば、あらぬものに言ひなしてやみぬるつとめて、御けづり髪（前少輔）、御手水など参りて、御鏡を持たせさせ給ひて御覧すれば、さぶらふに、犬の、柱もとに居たるを見やりて、「あはれ昨日、翁丸をいみじうも打ちしかな。死にけむこそあはれなれ。何の身にこの度はなりぬなむ。

いかに侘しき心地しけむ」とうち言ふに、この居たる犬のふるひわななきて、涙をただ落しに落すに、いとあさまし。さは、翁丸にこそはありけれ、昨夜は隠れ忍びてあるなりけりと、あはれに添へて、をかしきこと限りなし。御鏡うち置きて、「さは翁丸か」と言ふに、ひれ臥していみじう鳴く。御前にもいみじうおち笑はせ給ふ。

右近の内侍召して、「かくなむ」と仰せらるれば、笑ひのしるを、上にも聞こしめして、渡りおはしましたり。「あさましう、犬などもかかる心あるものなりけり」と、笑はせ給ふ。上の女房なども聞きて参り集りて、呼ぶにも、今ぞ立ち動く。「なほの顔の腫れたる、もの手をさせせばや」と言へば、「つひにこれと言ひあらはしつること」など笑ふに、忠隆聞きて、台盤所の方より「まことにや侍らむ。かれ見侍らむ」と言ひたれば、「あなゆゆし。さらに、さるものなし」と言はすれば、「さりとも、見つくる折も侍らむ。さのみも、え隠させ給はじ」と言ふ。

さて、かしまり許されてもとのやうになりにき。なほ、あはれがられてふるひ鳴き出でたりしこそ、世に知らずをかしくあはれなりしか。人などこそ、人に言はれて泣きなどはすれ。

この場面Bで注目したい点は二つある。一つは右近内侍を通じて帝の奏聞に達し、一条天皇が中宮定子のもとへ渡御するという具合

に話が展開していること。あと一つは、昨夜の右近内侍の判断「あらぬなめり」は、翁丸を救うために的確だったということである。

「つひにこれと言ひあらはしつること」と笑った動作の主体は不明であるが、この表現から右近内侍は、昨夜「言ひあらはし」てはいなかったことが明らかにされる。翁丸の賢さ、すなわち「昨夜は隠れ忍びてあるなりけり」という知恵と清少納言たちの同情の言葉に感動して涙を流す「かかる心」が、皆の感心を買い、その結果勅勤が許されたという展開になったわけだが、それというのも昨夜検分した右近内侍が、だれもが納得する理由を挙げて「翁丸ではない」と判定し「言ひあらはしつること」をしなかったことで、この翁丸の「賢さ」を補完しなければ、このような大団円の展開には至らなかつたはずである。本文では「笑ひのしる」（大声で笑う）としか描かれない右近内侍の反応だが、これは定子から「誤審」を指摘されたことに対する不満や照れ笑いではなく、昨夜の自分の判断によつて翁丸が救われたことに対する安堵の笑いとして見てよいだろう。

また、翁丸が撲殺されてしまつては、愛猫を愛するあまり一時の感情で勅勤を出した一条天皇の器量にも傷がつく。翁丸が傷を負いながらも無事だったことで、一条天皇も救われているのである。

この点において、翁丸をめぐり右近内侍が果たした役割は、甚だ大きかつたと見ることができよう。これは前に確認したように「榮

花物語」において、右近内侍が一条天皇の信頼を得て「かの御心よせの右近内侍」と記されていることも通じると見てよいだろう。

三、「枕草子」長編章段の右近内侍②——雪山章段——

次に同じく長編章段の第八三段「雪山章段」を検証してみたい。

長徳四年（九九八）の冬、職の御曹司での出来事を記したもので、こゝで行われた「不断の御読経」にまつわる「常陸の介」の話題と、「雪山作成」に続く「雪山はいつまであるか」という定子の問いから始まる残存期間の予想当て競争に熱中した顛末を、一条天皇の言動も交えて描き出した長編の章段である。右近内侍が登場する二場面とも内裏の女房としてその名が記述されるが、三卷本系本文ではすべて「左近の内侍」とある。しかしこれは萩谷氏がすでに指摘されたように、「古参の内裏女房」が「主上からのお使いで職曹司の中宮の御所に参向したのであらう」と見て、能因本系本文にある「右近の内侍」がもとの形とみてよいだろう。

まず場面Aでは、長徳四年冬十一月頃、職の御曹司で盛大に行われた不断の御読経の期間に現れた「なま老いたる女法師（後に「常陸の介」と呼ばれるようになる人物）をめぐる話題に右近内侍が関心を寄せたことが記される。

〈資料九〉第八三段「雪山章段」

A 右近の内侍の参りたるに、「かか^{カカ}る者をなむ、語らひつけて

おきためる。すかして常に来ること」とて、ありしやうなど小兵衛といふ人にまねばせて、聞かせさせ給へば、「かれ、いか^{カレ}で見侍らむ。必ず見せさせ給へ。御得意ななり。さらに、よも語らひ取らじ」など笑ふ。

その後また尼なる乞食^{カタク}のいとあてやかなる、出で来たるを、また呼び出でてものなど問ふに、これはいと恥づかしげに思ひてあはれなれば、例の、衣一つ賜はせたるを、伏し拝むはされどよし、さてうち泣き喜びて去ぬるを、はや、この常陸の介は来あひて見てけり。その後久しう見えねど、誰かは思ひ出でむ。

常陸の介は、女房たちから憎まれつつも興味と関心を引く存在として描かれ、職の御曹司によく姿を見せるようになる。定子は来訪した一条天皇付きの女房右近内侍に近頃の話題としてその顛末を話し、小兵衛という女房に常陸の介の舞や歌い方のまねをさせて披露している。

それを見た右近内侍は興味を示し、「必ず見たい。お得意さんを決して横取りするつもりはないから」と笑い興じる。続いて常陸の介と対照的な若い尼が登場し、みなの同情を買って衣を下賜されるが、それを常陸の介が見ていて来なくなったことが記されている。

この場面Aでは、右近内侍が登場することで、定子やその女房たちの、常陸の介に対する関心と評価が際立つことになる展開に注目

したい。また女房たちの関心が、常陸の介とは対照的な行動(すなわち「これはいと恥づかしげに思ひてあはれなれば」「うち泣き喜びて去ぬる」)を取った若い尼へと移っていく話の展開から、常陸の介と若い尼との対比が明確になる効果を上げていると見られる。次に示す場面Bでは、再び常陸の介がやってきた時の言動を右近内侍に連絡し、その返事にみなが興じている。

〈資料十〉 第八三段

B つごもり方に、少し小さくなるやうなれど、なほいと高くてあるに、昼つ方、縁に人々出で居などしたるに、常陸の介出で来たり。「などいと久しう見えざりつる」と問へば、「何かは心憂きことの侍りしかば」と言ふ。「何事ぞ」と問ふに、「なほかく思ひ侍りしなり」とて長やかに詠み出づ。「うらやまし足も引かれずわたつ海のいかなる人に物賜ふらむ」と言ふを、憎み笑ひて、人の目も見入れねば、雪の山に登りかかづらひありきて去ぬる後に、右近の内侍に「かくなむ」と言ひやりたれば、(右近内侍)「なごか、人添へては賜はせざりし。かれがはしたなくて、雪の山まで登りつたよひけむこそ、いとかなしけれ」とあるを、また笑ふ。

さて、雪の山つれなくて、年も返りぬ。一日の日の夜、雪のいと多く降りたるを、うれしくもまた降り積みつるかな。と見ると、「これは、あいなし。はじめの際をおきて、今のは掻き

捨てよ」と仰せらる。

この場面は、十二月十日の大雪の時に作成した雪山に、晦日の昼ごろ常陸の介が来訪したので、久しく来なかつた理由を問うと、皆に厚遇された「若い尼」への嫉妬を歌で披露し、「うらやまし足も引かれずわたつ海のいかなる人に物賜ふらむ」と詠んで拗ねたとある。これを不興に感じた女房たちが常陸の介を無視すると、雪山に登るなどろろついて立ち去つたのだが、この時の様子をあとで右近内侍に伝えると、「なぜこちら(内裏)に寄越してくれなかつたのか。常陸の介が所在なく雪山を上り下りしていたことは気の毒だ」との返事が来たので、皆笑つたとある。続いて雪山は少し小さくなつたものの、まだかなり高いまま年が明け、正月一日に降つた雪は定子の指示により除去されたことが記される。そしてこの場面以後、常陸の介はもはや登場することはない。

ここでは右近内侍が登場すること(13)で、常陸の介に対する評価が、定子の女房たちと対比されて際立っていることに注目したい。女房たちの関心はすでに若い尼へと移っているが、その場に居合わせていない右近内侍は相変わらず常陸の介への関心が高いままである。それを定子の女房たちは笑っている。つまり話の展開とともに、その場において見ていた女房たちとその場になかつた右近内侍との間で、常陸の介に対する関心の度合いが、対比されることよって明確になつているのである。この役割を終えた右近内侍は当該章段で

はこれ以後登場せず、常陸の介は話題から退場して出てこない。

さらに、右近内侍の文言として記述されている「かれがはしたなくて雪の山まで登りつたよひけむこそ、いとかなしけれ」に注目したい。この表現は『後撰和歌集』¹¹巻十四の第一〇六三番歌をふまえたものと見られるからである。

〈資料十一〉『後撰和歌集』巻十四（恋六）

女につかはしける

源善¹²の朝臣

1063 厭はれて帰り越路の白山は入らぬに迷ふ物にぞ有ける

この歌は、相手からすっかり嫌われてすごとく帰ってきた越路の白山は、雪が降るとすっかり迷ってしまい、入らないのにうろろろしてしまふものだ、の意である。当該章段で、常陸の介が定子の女房たちからすっかり嫌われ見向きもされないまま「雪の山に登りかかづらひありきて去ぬる」（雪山に登り、うろろる歩き回って立ち去る）という表現と、それを聞いた右近内侍からの文言「雪山まで登りつたよひけむ」（常陸の介は、雪山までのぼってさまよひ歩いたらしいが）という表現と対比させると、源善の歌は「厭はれて帰り越路の白山」と「迷ふ物にぞ有ける」という表現が、常陸の介の行動と心情に重なるものとして『枕草子』本文の表現と関わっていると見てよいだろう。

当該章段において、清少納言は雪山の残存期間延長を「白山の観¹³音、これ消えさせ給ふな」と祈り、そんな自分を「もの狂はし」と

記している。雪山を「白山¹⁴」になぞらえて表現しているが、この「白山」とは越前国の歌枕¹⁵で、今の石川・富山・福井・岐阜の各県にまたがる白山を指す。

ここで注目したい点は、右近内侍の文言として用いた本文の表現が『後撰和歌集』第一〇六三番歌をふまえたもので、それを想起させる効果を持ち、結果として職の御曹司の雪山を越路の白山と見立てることをさらに強調していることである。またそれによって当該章段の話の軸となっている「雪山がいつまであるか」という関心事と、話題の雪山の永続性を引き出す役割を持っていることにも注目したい。つまり、書き手が右近内侍の文言として本文に用いた表現が、その後の章段のプロット展開を方向付けているのである。

四、『枕草子』短編章段の右近内侍①——第九六段——

では、短編の二つの章段において、右近内侍はどのような役割を担っているのだろうか。まず第九六段「職におはしますころ、八月十日の月明き夜」から考察したい。長徳三・四年頃の職の御曹司での出来事を記した章段の全文である。

〈資料十二〉『枕草子』第九六段

職におはしますころ、八月十日の月明き夜、右近の内侍に琵琶弾かせて、端近くおはします。これかれ、もの言ひ、笑ひなどするに、廂の柱に寄りかかりて、ものも言はでさぶらへば

〔^{〔原上〕}など、かう音もせぬ。もの言へ。さうざうしきに〕と仰せらるれば、〔^{〔清少納言〕}ただ秋の月の心を見侍るなり〕と申せば、〔^{〔原上〕}さも言ひつべし〕と仰せらる。

職の御曹司で、八月十五夜近くの月が美しい頃、端近くに出てきて月を愛でて中宮定子の要請で、内裏から来ていた右近内侍が琵琶を演奏している。他の女房たちが談笑している中、清少納言は柱にもたれて無言のまま伺候していた。それを見た定子が清少納言に対し「なにか話してくれないと、物寂しいではないか」と発言を促した時の返答が、「ただ秋の月の心を見侍るなり」であった。

池田亀鑑氏の説によれば、清少納言の発言「ただ秋の月の心を見侍るなり」は、『白氏文集』^{〔17〕}「琵琶行」の一節

曲終收撥當心盡。四絃一聲如裂帛。

東船西舫悄無言。唯見江心秋月白。

曲終はりて撥を取め心に當たりて画し、四絃一聲帛を裂くが如し。

東船西舫悄として言無く、唯だ見る江心に秋月の白きを。

を直接引用したもの、とする。清少納言が「ものも言はでさぶらへば」すなわち「無言」のままにしていることに對し、中宮定子が「など、かう音もせぬ」と問い、その意味を尋ねると、「江心」を「月心」と変容させて「秋の月の心」すなわち「今の中宮の心」を拝察しているのであると答えた、と見る説に従いたい。萩谷朴氏が追認

しているように、これは皇后・中宮の唐名を「長秋宮」と呼称し、天皇を日、皇后を月に喩えることから導き出される解釈で、首肯されるべきものと見る。

当該章段の史実年時は、職の御曹司在任期間（長徳三年六月から長保元年八月九日）と本文にある「八月十余日の月明き夜」の記述から、長徳三年もしくは四年（九九八）の八月ということになる。^{〔18〕}

萩谷氏は、関白道隆没後のつらかった長徳元年・二年を経て三年春には配所に下向していた伊周・隆家の罪科が許されて帰京し、十二月十三日には脩子に内親王宣下があるなどした状況から、当該章段をようやく明るさを取り戻した時期の「長徳四年秋」と考証され、「長徳四年の仲秋明月は、久しぶりに澄み切った中宮のご心境をそのままに現わすものであったといえよう。清少納言が「秋の月の心」といったのは、ただの名月の美しさを指したのではなく、中宮定子のご心中そのものを喩えたのである」と解釈される。定子を取り巻く状況の好転と「秋の月の心」を合わせ考えれば、すでに指摘^{〔19〕}されているように、清少納言のこの発言は次に示す和歌を参考としたものと見ることができよう。

〈資料十三〉

① 『後撰和歌集』卷六 秋中

（八月十五夜）

よみ人しらす

326 月影は同じ光の秋の夜をわきて見ゆるは心なりけり

② 『元輔集』(前田家藏本)

「八月十五夜」として

164 飽かずのみ思ほゆるをばいかがせむかくこそは見め秋の夜の月²⁾

今宵の月がとりわけすばらしく見えるのは我が心のせいだ、と詠んだ『後撰和歌集』所収歌と、いくら見ても見飽きない今宵の月はこんな風に鑑賞したいものだ、と詠んだ父元輔の歌である。当該章段において、清少納言は「秋の月の心」と表現することで、「秋の月を愛でる人の心」として中宮定子の心を推察し、同時に澄みきった名月の美しさ自体をも愛でているのだろう。現段階では当該章段を長徳三年秋か四年秋かと断定するに至らないが、いずれにせよ、この名月の美しさは心にしみるものであり、その感動を定子と清少納言は共有し、互いに確認しあつたエピソードということになる。

この章段で注目したい点は、右近内侍による琵琶の演奏が契機となつて、漢詩文『白氏文集』「琵琶行」や和歌と発想が似通う清少納言の言動につながっていくことである。つまり、プロットが展開していく契機として、右近内侍が琵琶を演奏する記事を位置付けることができるのである。そのうえ内裏の女房である右近内侍は、定子と清少納言との間で交わされたこのやりとりを実際その場で見聞きたこととして、内裏に戻った後で一条天皇にこの一件を報告したのであろう。そこに、書き手が右近内侍の名をわざわざ記すことの

意味とその効果を確認することができる。

五、「枕草子」短編章段の右近内侍②―第二二四段―

最後に、第二二四段「細殿に便なき人なむ」を検討してみたい。内裏の弘徽殿もしくは登華殿の細殿での出来事とその顛末を記した章段である。

〈資料十四〉第二二四段「細殿に便なき人なむ」

「細殿に、便なき人なむ、暁に笠さして出でける」と言ひ出でたるを、よく聞けば、わが上なりけり。地下など言ひても、目やすく人に許されぬばかりの人にもあらざるを、あやしめと仰せられたり。何ごとにかとて見れば、大笠の絵を描きて、人は見えず、ただ手の限りをとらへさせて、下に「山の端明けし朝より」と書かせ給へり。

なほ、はかなきことにも、ただめでたくのみおぼえさせ給ふに、恥づかしく、心づきなきことはいかでかご覧せられじと思ふに、かかるそら言の出でくる、苦しけれど、をかしくて、異紙に、雨をいみじう降らせて、下に「ならぬ名の立ちにけるかな、さてや、濡れ衣にはなり侍らむ」と啓したれば、右近の内侍などに語らせ給ひて、笑はせ給ひけり。

ここでは清少納言の恋の噂をめぐって、定子とのやりとりの顛末

が描かれている。定子と清少納言との間で、絵と和歌の一節で構成された手紙がやりとりされたことを記し、定子からの手紙に対して別紙で雨を降らせた絵の下に「ならぬ名の立ちにけるかな、さてや濡れ衣にはなり侍らむ」と記して書き送った清少納言の返答をあわせると、この一連のやりとりは「三笠山山の端あけし朝より雨ならぬ名の立ちにけるかな」という連歌仕立てとなる。これは萩谷氏が指摘されたように、藤原義孝の和歌「あやしくもわれ濡衣を着たるかな三笠の山を人に借られて」（『義孝集』⁽²²⁾第一八番歌）をふまえての合作となっている。

この噂話と清少納言の回答を、定子は興味深い話題として居合わせた右近内侍に語り、笑っているのである。その後の展開は本文に書かれていないが、「右近内侍など」とあることから、定子はこの一件を内裏の女房たちに話し、その代表としてわざわざ右近内侍の名を記したのは、この話題が一条天皇の耳にも伝わったということを読み手に暗示させるのに、右近内侍こそふさわしい人物だったから、と見てよいだろう。

つまり、右近内侍の名を掲示することで、この噂話が今後宮中で広がるだろうことを予測していると見られる。これは先に確認した第九六段と同じ効果を持つと言えよう。この点において右近内侍は、短編章段においても話題を展開させる役目を負っているということになる。

まとめ

以上、右近内侍が登場する記述について、詳細に分析してきた。初めに確認したように、『栄花物語』においては、一条天皇が后たちと密かに連絡を取り合う時に遣わされる内裏の女房として描かれている。一条天皇からそれだけ信頼されていた女房として描き出されていることになるが、『枕草子』においても、第六段「翁丸章段」で見られたような配慮ができる女房として描かれており、また第八段「雪山章段」では正月三日の内裏への急な入内をひかえた大事な時期に職の御曹司にやつて来ていたり、また連絡を取り合っていたりしていることから、おそらくは右近内侍を通じて、職の御曹司にいる定子の入内をめぐる打ち合わせが成されていたものと考えてよいだろう。こうした描かれていない裏の事情も合わせて『枕草子』における右近内侍の名と役割は、当時かなりの重さを持つていたと考えられる。

また短編章段においても、右近内侍が登場する本文の表現とその後展開という視点から検証すると、やはり右近内侍の言動は、プロットの展開を予測させるために重要な役割を持つていたことが明らかになった。

つまり右近内侍は、『枕草子』において脇役ではありながらも、書き手によって、章段の場面展開に重要な役割を果たす登場人物と

して描き出されているのである。それは、書き手が当時の右近内侍が果たしていた役割を見極めていて、本文に右近内侍の名を明記することの効果も、十分に計算した上で記していたということになる。このことは『枕草子』の章段構成における特徴の一つ、と指摘することができるだろう。

【注】

(1) 『枕草子』本文は、すべて三卷本系の陽明文庫本を底本とした石田穰二氏訳注「新版 枕草子」(角川ソフィア文庫)による。ただし一部私に仮名表記を漢字に改めた箇所がある。

(2) 小論『枕草子』における表現の重層性——鳥のそら音——章段における会話と構成から——『古代中世国文学』第二四号、平成二〇年三月)、『枕草子』積善寺供養章段の構成——時間軸の不統一とモザイクの様相——『国文学攷』第一八七号、平成十七年九月)、『枕草子の新研究——作品の世界を考える——』所収(浜口俊裕氏・古瀬雅義編著、新典社、平成一八年)、『枕草子』「憚りなし」の指示する『論語』基本軸——行成との会話を支える『論語』古注と章段構想——『論考』平安王朝の文学——一条朝の前と後——所収(稲賀敬二先生編著、新典社、平成十年)等。

(3) 「内侍」とは、後宮十二司の一つで、長官が尚侍二人で従三位相当。大臣の娘が任ぜられ、天皇の后になっていく者もいた。次官が典侍四人で従四位相当。賢所の管理をする。公卿・殿上人の娘が任ぜられ、天皇の乳母も任ぜられた。掌侍は四人で従五位相当。平安初期には権官二名を加えて六人。内侍の役目に「内侍宣」があり、勅旨を藏人に伝達することがあった。和田秀松氏著・所功氏校訂『官職要解』(講談社学術文

庫)によると「たんに内侍とばかり書いてあるのは、この掌侍のことである」とある。『禁秘抄』(『群書類従』第貳拾六輯「雑部」所収)によると掌侍は「禁中殊重職。尤可下撰其器重補」。只諸大夫公卿女。雖有例非普通事。納言孫又同品様程公卿孫也。又侍臣女也。生公違女。又只諸大夫女。是殊父ナド不レ越レ諸家。老女也。但少々左道人交賦。尤可レ有レ清撰レ事也。雖不レ越レ諸家、非レ重代レ者必不レ可レ補」とする。

(4) 『権記』は、史料纂集(統群書類従完成会)による。

(5) 『御堂閔白記』は、大日本古記録(岩波書店)による。

(6) 『時明集』は、靈元天皇宸筆の外題を有する宮内庁書陵部蔵本(五〇一・三〇)を底本とする『新編国歌大観』第七巻私家集編III(角川書店、平成元年)による。

(7) 同日条に「播磨守源時明(非道理、讃岐任第三年辞退、今年當得替年、余定問陳此由)とあり、県召除目で実資は反対したが、源時明に決定したとある。へへ部分は小字二行書き。『小右記』は、大日本古記録(岩波書店)による。

(8) 『采花物語』は、梅沢本(旧三条西家本)を底本とする松村博司氏著『采花物語全注釈』二(角川書店、昭和六二年第七版)による。

(9) 河北勝氏は『采花物語』の成立と特色(山中裕氏・久下裕利氏編著『采花物語の新研究——歴史と物語を考える——』所収、新典社、平成十九年)において、「読んでくれるいわば読者の対象としては、作者と同程度の階層、つまり宮廷・後宮などの女房たち、又は「家の女房」女性性の知識人たちの為に、と考えた。即ち、女の筆で、女たちの為に書く、ということが最も重要視された」とされる。河北氏は正編三十巻の作者は赤染衛門であろう、とする立場である。この延長線上で考えると、描かれた右近内侍の人物像は、作者も含めた一条朝の女房たちの共通理解であったことになる。

(10) 『枕草子』三卷本系の動物に右近内侍に関する記述は確認できない。以下、

江戸時代以降の主な先行論を通観しておきたい。

・加藤警齋「清少納言枕双紙抄」(延宝二年五月刊) 第七段の標注に「右近 片野少将季繩が女と云説あり。妹と云説あり。系図下に注之」とある。本文は加藤警齋古注釈集成2の複製本(新興社 昭和六〇年)による。

・武藤元信氏著『枕草紙通釋』(有朋堂 明治四四年) 第七段で「○右近作者部類に『右近藤原季繩女』とする。なお『○あらぬなめり』について『右近の心には翁丸としれども、藏人に見認められん事を恐れて、かくはいへるにや』と注釈されている点は首肯される。

・金子元臣氏著『枕草子評釈』(明治書院 増訂二八版昭和十七年) 第七段〔評〕「右近」で「右近少将藤原季繩女」とする。根拠の提示はなし。これら「翁丸章段」の注で示された「右近少将藤原季繩女」は、醍醐天皇の皇后穩子に仕えた女房で、村上朝に活躍した人であるため、『枕草子』とは時代が合致せず別人とみるべきであろう。

・角田文衛氏「清少納言の生涯」(『枕草子講座』一 有精堂 昭和五〇年) 右近を、清少納言以外の橘則光の妻とする。

・石田穰二氏『新版 枕草子』(角川ソフィア文庫 初版は昭和五四年) 翁丸章段の「右近内侍」について、脚注で「主上お付きのいわゆる上の女房。中宮の御信任も厚かつたらしい」「内侍は内侍司の掌侍(ないしのじょう)の略」とする。

・萩谷朴氏『枕草子解環』一(同朋舎出版 昭和五六年) 第六段の語釈「右近」において、右近を清少納言以外の橘則光の妻の母(姉)とし、則光との間に光朝を設けた橘行平娘の母で行平室として、角田説を否定する。その根拠は、『小右記』寛仁三年(一〇一九)七月二五日条の「記事」「右近尼(陸奥守則光姑)」と、「尊卑分脈」橘則光の男・光朝の

「母行平女」を合わせた考証による。ちなみに『小右記』寛仁三年七月二五日条は「右近尼(陸奥守則光姑)、許送薰香二箇(銀々)。加和哥、有返哥。使出納男与小祿(重單)」

・増田繁夫氏著『枕草子』(和泉古典叢書1 昭和六二年) 補注10 右近内侍と右近藏人を識別。則光姑の右近尼は、小野宮家の女房から内裏の女房となった右近藏人と見て、「両者の種姓は未詳」とする。

・津島昭宏氏は『枕草子大事典』(勉誠出版 平成十三年)の「右近の内侍」項目において、右近内侍の研究史を簡潔にまとめた上で「判然としない」とする。

(11) 能因本系本文においても、同じ箇所について「右近内侍」とあり、異同は確認できない。なお能因本系本文は、三条西家旧藏現学習院大学蔵本を底本とする根来司氏編著『新校本 枕草子』(笠間書院 平成三年)による。

(12) 萩谷朴氏『枕草子解環』二(同朋舎出版 昭和五七年)の当該章段〔語釈〕に「三卷本に『左近の内侍』とあるのは誤り、能因本によって改める。古参の内裏女房。主上からのお使いで職曹司の中宮御所へ参向したのである」とされる。同じく「右近内侍」が登場する第三二四段「細殿に便なき人なむ」における三卷本系本文では、第二類本の弥富本・刈谷本・内閣文庫本が「左近の内侍」とするのに対し、陽明文庫本など第一類本系と前記三本以外の第二類本は「右近の内侍」とする。本稿も萩谷説を支持して「右近の内侍」と見る立場をとる。

(13) 三田村雅子氏は『枕草子 表現の論理』(有精堂 平成七年) 所収の「ウチ」と「ソト」空間の変容」において、定子や女房たちから鑿聲を買った常陸の介の行動を右近内侍に紹介することによって「常陸介を演じ直す他者の再演」ととらえ、「毒を抜き取られた再演によって、ウチなる世界に再び取り込まれていることに注目すべきであろう」とされる。

本稿とは論点を異にするが、清少納言が「その一件を面白おかしく語り直して右近内侍に報告している」とみる点と「清少納言の話芸による再演の形で、常陸介の行動は一層光彩を加えているようである」と解釈する点は、話題の再構成と対比による効果として通じるものがある。

また萩谷氏は、『新潮日本古典集成』『枕草子』上の当該章段頭注で「雪山をインドの雪山(ヒマラヤ)に擬し、常陸のすげの行為を、釈迦の雪山苦行にかけて、同情の意を表した。この右近内侍の大袈裟な物いいを、中宮の女房たちは『また笑ふ』のである」と注釈される。『大般涅槃經』巻十四に見える雪山童子半偈投身説話をふまえたと思われる。当該章段末尾には、いよいよ二十日過ぎになって雪山を取りに行かせた使いの者が蓋だけを持ち帰ってきた法師の様だったとして、この説話をふまえたと思われる「身は投げつ」という表現が用いられていることと関わらせて考えれば、右近内侍の文言は、雪山をめぐるこの後の展開への伏線としても見る事ができる。

(14) 『後撰和歌集』は、『新編国歌大観』第一巻勅撰集編(角川書店 昭和五八年)による。『枕草子』で『後撰和歌集』所収歌をふまえた表現は他に五例確認できる。第三二段「小白河といふ所は」では、当時の三位中将道隆が「いと直き木をなむ押し折りためる」と発言し、第一一五五番歌「直き木に曲がれる枝もある物を毛を吹き疵を言ふがわりなご」の初句の表現を用いて、中納言義懐が女車に返事を強いてもたついた様を揶揄し、一堂の笑いを誘っている。他にも第六四段「草の名は」、第二六三段「関白殿二月二十一日に」、第二七七段「成信の中將は」、第二七八段「常にお歌を想起させるものとして、歌の一部を引いた表現が『後撰和歌集』所

(15) 片桐洋一氏著『歌枕歌ことば辞典 増訂版』(笠間書院 平成十一年)によれば、『古今集』の躬恒の歌「消えはつる時しなれば越路なる白

山の名は雪にぞありける」(霧旅)のように、雪がよまれることが圧倒的に多かった。また右の「消えはつる時しなれば」もそうだが、その雪は「あら玉の年をわたりてあるが上に降り積む雪の絶えぬ白山」(後撰集・冬・読人不知)「白山に降る白雪の去年の上に今年も積る恋もするかな」(古今六帖)などとよまれ、年を越しても消えないというイメージを持っていた」とある。

(16) 「白山」という歌語の持つイメージが「古今和歌六帖」所収歌の表現「去年の上に今年も積もる」(第六九四番歌)を受けて、雪山の年越しと新春に降った大雪へと話が展開していくことに効果的な役割を持つことについては、平成二〇年九月十三日に奈良大学で開催された中古文学会関西部会第二〇回例会で発表しており、それをまとめた別稿を用意している。

(17) 『白氏文集』は岡村繁氏著の新釈漢文大系一一七『白氏文集』二下(明治書院 平成十九年)による。

(18) 赤間恵都子氏は近著『枕草子日記的章段の研究』(三省堂 平成二一年)所収の「資料 日記的章段の年代考証一覧」において当該章段を「職曹司在任時代」の「長徳三年か四年の秋」と考証されている。

(19) 萩谷氏校注の新潮日本古典集成『枕草子』上(新潮社 昭和五二年)の頭注、同氏『枕草子解環』二(同朋舎出版 昭和五七年)の当該章段「語釈」、また松尾聰氏・永井和子氏校注の新編日本古典文学全集『枕草子』(小学館 平成九年)の当該章段頭注において指摘されている。

(20) 『元輔集』は、後藤祥子氏著『元輔集注釈』(私家集注釈叢刊6・貴重本刊行会 平成十二年第二版)による。

(21) 当該歌は、第二句を「思ほえむをば」として後に『拾遺和歌集』巻三秋の第一七四番歌として撰集されている。詞書に「円融院御時、八月十五夜描ける所に」とあることから、内裏屏風歌であることがわかる。田

高智子氏著『屏風歌の研究 資料編』（和泉書院 平成十九年）によれば、永祚二年（九九〇）六月以前屏風かと考証されている。

(22) 萩谷朴氏『枕草子解環』四（同朋舎出版 昭和五八年）の当該章段「語釈」に詳細な分析がなされている。

(23) 『義孝集』は『新編国歌大観』第三卷私家集編Ⅰ（角川書店 昭和六〇年）による。なお当該歌は『拾遺和歌集』卷十八雑賀の第一一九一番歌として撰集されている。

【付記】

本稿は、平成二〇年度広島大学国語国文学会研究会集（平成二〇年十一月二三日 広島大学大学院文学研究科 B251教室）において口頭発表した内容に加筆し、論文にまとめたものである。席上貴重なご意見とご教示を賜った竹村信治先生をはじめ、黒木香氏、そして西本寮子氏に謹んで御礼申し上げます。

— ふるせ・まさよし、安田女子大学准教授 —

国文学攷投稿規定

- 一、本誌は広島大学国語国文学会の機関誌として、学会員からの投稿を常時募集します。
- 一、投稿論文の採否は、当学会役員より選出された編集委員によって構成される編集委員会で決定します。
- 一、採否についてのお問い合わせには一切応じません。
- 一、投稿論文は四百字詰原稿用紙四十枚以内を原則とします。
- 一、投稿論文の末尾に氏名のふりがな・所属を明記してください。
- 一、ワープロ原稿での投稿の際には、縦書きの場合は30字×21行、横書きの場合は40字×35行の書式を使用してください。
- 一、編集の都合上、なるべくフロッピーでの投稿をお願いします。その際、使用の機種・ソフト名を明記してください。ただし、必ずプリンアウトした原稿の同封をお願いします。
- 一、論文掲載の場合、本誌三部と抜き刷り三十部を贈呈します。余分に必要な場合は、あらかじめお申し出があれば、実費でお頒ちします。
- 一、本誌に掲載された論文等の著作権は、著者に帰属します。ただし、当学会は本誌に掲載された論文等を電子化し、公開することができます。
- 一、投稿論文の送り先 〒七三九八五三 東広島市鏡山一―二―三

広島大学大学院文学研究科内
広島大学国語国文学会事務局